

書評論文 葛谷彩・芝崎厚士編『「国際政治学」は終わったのか—— 日本からの応答』（ナカニシヤ出版、2018年11月）

Review Essay: Aya Kuzuya and Atsushi Shibasaki, *The End of International Relations?
Reply from Japan*, Nakanishiya Shuppan, November 2018.

大山 貴稔⁽¹⁾

1. はじめに

本稿は、葛谷彩・芝崎厚士編『「国際政治学」は終わったのか——日本からの応答』（ナカニシヤ出版、2018年11月）を俎上に載せ、同書が刊行されたことの意義と残された課題について検討するものである⁽²⁾。まずは研究史を踏まえて本書の位置づけを確認し（第2節）、所収された論考に見られた論点を整理する（第3節）。そこから同書で扱われたこと／扱われなかったことを明らかにして、副題に掲げられた「日本からの応答」という切り口について批判的に考察を進めていく（第4節）。この考察を通して、本書では踏み込んで論及されなかった「日本における応答（歴史研究や地域研究における自己省察）」という論点を新たに提示したい。

2. IRにおける自己省察の展開——本書の研究史上の位置づけ

表題に掲げられた刺激的なタイトルからもわかるように、本書は「国際政治学／国際関係論（International Relations: IR）」というディシプリンを批判的に見つめ直した野心的な著作である。IRの現状に違和感を抱いた研究者たちが稿を寄せており、ポスト実証主義的な見地からアメリカを中心とするIRのあり方に批判の矛先が向けられている。ここでいうポスト実証主義とは、存在論（物質／観念）・認識論（本質主義／相対主義）・方法論（経験論的分析／解釈学的分析）の3つの次元において実証主義と対を成す立場の総称である（大賀2006:40-41）。こうした立場のなかでも、コンストラクティビズムや批判理論、ポスト構造主義をはじめとする多様なアプローチがあるように（Peoples and Vaughan-Williams 2015；プラサド2018）、本書においても各人各様の切り口が見受けられる。それゆえに本書では多岐にわたる論点を取り上げられているのだが、IRに携わる研究者たちがディシプリンの自己省察をめぐって論じている点において一貫している。そこで、本節ではIRにおける自己省察の歴史を簡潔に振り返り、それを踏まえて本書の位置づけを確認することにしたい（英語圏のIRにお

ける自己省察の展開については、同書所収の五十嵐論文と安高論文に詳しい)。

英語圏の IR において自己省察が意識されるようになった契機としては、1980 年代に繰り広げられた「第 3 の論争 (実証主義とポスト実証主義の論争)」(Lapid 1989) にまで遡る。当時、アメリカを中心とする IR ではネオリアリズムやネオリベラル制度論と括られる実証主義的なりサーチプログラムが大きな潮流を成していた (Wæver 1996: 162-170)。すなわち、国際政治をアナーキーな構造によって形づくられているものとみて、そこでは国家が合理的なアクターであるという前提を据え、軍事力や経済力のような計測しやすい変数に焦点を当てながら仮説検証を行うという研究の手順である。このようなりサーチプログラムに対し、国際レジーム論のような主要課題に取り組む研究者からも限界が指摘され始めた頃から (Kratochwil & Ruggie 1986)、再帰性/自省性 (reflexivity) を視野に入れたポスト実証主義的なりサーチプログラムが意識されるようになった。この新たな潮流によって従来は与件とされてきた認識が多方面にわたって見直され、その動きは「第 1 の論争 (アイディアリズムとリアリズムの論争)」の再評価をはじめとする学説史の再考をも促した (西村 2011: 232-234)。こうしたポスト実証主義的なりサーチプログラムは、ヨーロッパやカナダを中心に発展していくことになった。

他方で、日本では 1980 年代に「ほとんどウォルツの『国際政治の理論』に注目しなかった」こともあって、1990 年代には「なぜ今北米で皆がコンストラクティビズムに注目するのかがよくわからない」という「日本と北米の学界の間で若干のコミュニケーション・ギャップ」が生じていた (田中 2000: 4)。日本では行動主義的ないし実証主義的なりサーチプログラムが広まっていなかったため、社会科学の前提から見つめ直すような初期のコンストラクティビズムには意義を感じなかったのだろう⁽³⁾。このような文脈のずれがあったからか、日本では国際関係におけるエージェントと構造の相互構成などはあまり深く考究されず、もっぱら規範の作用を視野に入れるための分析視角としてコンストラクティビズムは受容された。研究アプローチとしては日本でも馴染み深い歴史研究と親和的だったため、2000 年代になってからは規範に焦点を当てた研究が飛躍的に増えることになる。それでもやはり「第 3 の論争」における存在論・認識論・方法論レベルの対立軸が意識されることは少なく、とりわけポスト構造主義やフェミニズムに見られる知と権力の結びつきを問うアプローチは広範な関心を集めるには至らなかった⁽⁴⁾。欧米とは異なる文脈で発展してきた日本の IR において、ポスト実証主義的なりサーチプログラムは直接的には受容されなかったと言えるだろう。

しかしながら、近年になって日本の IR でもディシプリンの来歴を問い直す研究が活発になっている。冷戦の終焉に加えてグローバル化や国際テロリズムといった世界の変転を象徴する言葉が広まった 2000 年代半ば頃から (とりわけ対テロ戦

争やイラク戦争によって問題意識を喚起され)、リアリズムとリベラリズム、保守と革新、あるいは善と悪といった2項対立に枠づけられた認識の限界が日本でも意識されるようになった。そうしたなかで、新たな認識枠組みを模索するための手がかりとして、2項対立的な鑄型を基礎づけてきた過去の議論を掘りかえすという潮流が生まれた。戦間期から第2次世界大戦直後にかけての英語圏の国際関係思想はもとより(西村2012;宮下2012;三牧2014;山中2017;西2018など)、同時期の日本で織り成された国際秩序論の諸相も明るみに出され(酒井2007;芝崎2009;辛島2015;春名2015;大矢根2017など)、さらにはドイツの知的伝統からもリアリズム的な思惟様式が相対化されるに至っている(葛谷2005;大原2013など)。かくして、かつての教科書などで描かれてきた「英語圏のIR(とりわけリアリズム)」像は大幅に書き換えられ、「英語圏のIR」の輸入学問と言われてきた日本のIRにも特有の思想水脈が見い出されることになった。いわば、既存の2項対立的枠組みに行きづまりを感じるなかで、参照点とされる議論の豊饒さを描き出す思想史的な研究が活発になり、多くの場合は紋切り型のリアリズム観を打破するための自己省察に力点が置かれている状況である。

以上の研究史を踏まえたときに、本書で行われた自己省察の特色としては次の2点があげられよう。第1に、日本では抜け落ちがちであったポスト実証主義の展開を視野に入れ、日本語で繰り広げられるIRの自己省察に接続させたという特色である。上述のように思想史の見地からの自己省察は日本でも盛り上がりを見せているが、ヨーロッパを中心とするポスト実証主義の潮流が積極的に消化されたわけではなかった。このような状況において、1980年代から40年近くにわたって発展してきたポスト実証主義の見地からの論点が織り込まれた本書の意義は決して小さなものではない。第2に、IRにおけるアメリカの知的ヘゲモニーを批判的に捉えたうえで、「日本からの応答」を掲げたという特色である。英語圏の一部では実証主義的なりサーチプログラム(とりわけネオリアリズム)への違和感が端緒となって、非西洋の国際関係理論を発掘する試みも活発になっている。この新たな潮流にも、アメリカの社会科学をいかにして克服するかという「穏健な英国学派」的な立場(Acharya & Buzan 2010)から、IRに潜む知と権力の結びつきを糾弾する「ラディカルな第3論争」的な立場(Shilliam 2011)まであって、根幹を成す問題意識には少なからず温度差が見受けられる(大賀2013)。そうしたなかで、日本でも前者の流れを汲みつつ日本の国際関係理論の展開を跡づける自己省察が盛んになってはいるが(大矢根2017;初瀬ほか2017など)、英語で論じ交わされている議論に対して明示的な「応答」を試みたものはまだ少ない⁽⁵⁾。このように整理してみると、IRにおける自己省察が国内外で盛り上がりを見せるなかで、ポスト実証主義の潮流を導入しながら日本のIRという文脈を意識化したところに本書の特色がある、とさしあたりは整理できよう。

3. 日本語の IR 教科書を大幅に改新——本書で繰り広げられた議論

前節では本書の大枠にのみ着目して研究史上の位置づけを明らかにしてきたが、ここからは各章の内容に踏み込んで考察することにしたい。本書の目次は表 1 に示している通りである。以下では、本書の議論のきっかけとされている「2 つの『終わり』論」と、それに「日本からの応答」を試みる理由を概観したうえで（序章）、各所収論文で扱われた論点を評者なりの観点から整理を試みる。

本書で念頭に置かれた「終わり」論の 1 つ目は、「リベラル国際秩序」の「終わり」を指摘する議論のことである。ここでいう「リベラル国際秩序」とは、①人権や法の支配、自由貿易といった理念のもと、②多国間主義を標榜する国際機関や制度によって維持されつつも、③アメリカの軍事力・経済力による支えなくしては成り立たなかった国際秩序のことである（同書：3）。この秩序が「終わり」を迎えたとされる背景としては、①テロや金融危機が相次ぐなかでグローバル化に伴うリスクの高まりがあらためて意識されたことや、②格差の広がり一段と顕在化するなかで反グローバリズムとポピュリズムが求心力を得ていること、③中国がこれまでの西側主導の国際秩序と競合する枠組みを構築し始めたこと、があげられている（同書：3-4）。

もう 1 つの「終わり」論は、*European Journal of International Relations* 誌（以下、*EJIR*）の特集号 “The End of International Relations Theory?” に端を発する議論である（同書：5-9）。ダン、ハンセン、ワイトが著した巻頭論文では、IR というディシ

表 1 本書の目次

序章	葛谷彩「2 つの『終わり』論と日本の視点」
第 I 部 「国際関係論」(IR) と「国際政治学」への批判——理論・思想の観点から	小林誠「パワー・ポリティクスという示準特性の崩壊——国際政治学の最終的勝利と死滅」
	五十嵐元道「リフレキシビズム——ポスト実証主義の理論的展開」
	芝崎厚士「ディシプリンの国際文化交渉——日本の国際関係研究と IR 関係史序説」
第 II 部 日本からの応答——地域研究・古典的国際政治論の観点から	酒井啓子「終わらない国際政治学と下僕ではない地域研究のために——中東地域研究が提示するもの」
	西村邦行「統一を欠く分野——国際関係論の政治性」
第 III 部 外部の視点から見た「『国際政治学』の終わり？」論	安高啓朗「国際関係理論は終わったのか——グローバル国際関係学にみる自己省察の行方」
	高橋良輔「時政学の射程——国際政治学の時間論的展開に向けて」
	前田幸男「国際政治学はマテリアル・ターンの真意を受けとめられるか？——多重終焉の黄昏の中で」
終章	芝崎厚士「終わりは、はじまり」

リンの存在意義をめぐる次のような危機感が表明されていた (Dunne, Hansen and Wight 2013)。曰く、①パラダイム間の大論争 (Great Debates) が低調になって理論研究が「タコツボ化」し、②各理論間の相互コミュニケーションが減るなかでディシプリンとしてのアイデンティティは薄れつつあり、③さらにはグローバル化に伴って IR が俎上に載せてきた「国際的なもの (the International)」自体も融解している。こうした診断に基づく問題提起を受けて、IR というディシプリンのあり方があらためて問われているのである。

序章の葛谷論文によれば、2つの「終わり」論は「ともに『他者』への無関心や軽視という点で共通する」(同書：11)。そこでは「近代西洋以外の時間的・空間的他者」が等閑視されており、それゆえに「日本からの応答」が意義を持つという。なぜなら、日本の IR は歴史研究や地域研究が盛んという特徴に加えて、次の4つの距離をとれる点において稀有な立場にあるからである。すなわち、①西側諸国の一員ではあるが非西洋国である、②アメリカの影響を受けてはいるが大陸ヨーロッパを中心とした戦前以来の知的伝統がある、③「敗戦国」としての過去ゆえに権力政治や軍事力偏重と一定の距離がある、④中国やインドといった新興国とも違って安易なパワーシフト論からも距離がある、という点を踏まえたときに、日本独自の視野が広がっているのではと期待されているのである (同書：13)。これは「執筆者全員のコンセンサスではない」(同書：13)と断られてはいるものの、本書から思考を巡らすにあたって欠かせない要諦ではあるだろう。

さて、以上の問題提起を踏まえて本書を紐解いてみると、全体を通して次の3つの課題に取り組まれていたと大別できよう。第1に、他者に向き合う姿勢／倫理を再考するという課題である。そのなかの1つの論点として、分析者が眼前の研究課題に没入しすぎるあまり、自らの依って立つ視座がどのような前提のうえに成り立っており、自らの研究がどのような社会的文脈のなかで価値づけられているのかに無頓着になることの危険性が取り上げられた。こうした分析者と事象を取り巻く不可視な構造を明るみに出すリフレキシビズムの方法論が五十嵐論文において紹介され、そのような見地を踏まえつつ IR ないし国際政治における「中東地域」の扱いが酒井論文では問題視された。「中東」は国際政治を左右する重要な地域となっているが、それでもなお客体としての位置づけでしかなく、余所者同士が「自分たちが考える中東」をめぐる争っているにすぎないという酒井論文の指摘には重みがある。他にも、外国語の概念という未知なる他者に向き合うときの言葉の行き来に焦点を当てた芝崎論文や、新人世への突入という時代認識を踏まえたうえで人間と地球のかかわり方を見つめ直した前田論文など、従来の IR においては意識されることの少なかった他者との向き合い方について考察されている。

第2に、IR が抱えてきた問題について内在的に検討するという課題である。とりわ

け、国内／国際を質的に峻別することで足場を固めてきたディシプリン（ないし、その中核に据えられたリアリズム）に批判の矛先が向けられている。小林論文ではダール＝モーゲンソー的な操作的パワー概念から導き出されるパワー・ポリティクスの世界観が取り上げられ、それが明らかに破綻を来した世界観であるにもかかわらず、政策的実践と知的ヘゲモニー闘争という2正面作戦によって命脈を保ってきたと指摘される。続けて西村論文に目を向けると、IRにおける論争が政治（慣行的なルーティーンの領域）と政治的なるもの（根拠となる土台はないが決断を要する領域）の緊張関係に由来していたことが明らかになる。国際社会を無政府状態ないし自然状態という理念型で認識してきたゆえに、時代ごとの国際社会の不安定さに応じて「政治とはなにか」を自問してきた様子が浮き彫りにされている。こうしたディシプリンに対する自己省察を踏まえつつ、その1つの到達点であるグローバルIRの現状と展望を示したのが安高論文である。グローバルIRにおける国際的なるものの再考や多元的普遍主義の標榜に焦点を当て、それらの試みが掛け声倒れに終わらないためには理論形成が帯びる政治的かつ倫理的な意味合いを意識しつつ、具体的なエートスの涵養に向けて踏み出すことが欠かせないと論じられる。

第3に、グローバルに張りめぐらされた関係性を捉え直すための新たな手がかりについて考察するという課題である。この課題に主眼を置いたものとして、日本のIRでは永井陽之助やヴィリリオ（Paul Virilio）以降は低調であった時政学の観点を掘りかえし、主にヨーロッパで進められている「時間論的転回（temporal turn）」をめぐる検討と接続させた高橋論文がまずあげられよう。他にも枚挙にいとまがないほどの手がかりが同書には織り込まれており、フレイザー（Nancy Fraser）の公共圏理論を糸口にしたパワー・ポリティクスの再考（小林論文）、ディシプリンの国際文化交渉という切り口（芝崎論文）、他者との関係性が交錯した結果として「地域」が表象するものを捉える枠組み（酒井論文）、アクターネットワーク理論などに軸足を置いた新たなマテリアリズムの視座（前田論文）といったように、ディシプリンの自己省察を経てさらに一步踏み出そうとする知的営為がすべての論考に見受けられる。これまでにみてきたように、本書全体を通して相互に絡み合った3つの課題に取り組みられていたと言えるだろう。どの課題に比重を置いているかは論考ごとに濃淡があるものの、①一般に流布する紋切り型のパワー・ポリティクス観から距離を置き、②安易に科学主義へと傾倒することを危惧しており、③それらを乗り越えるためにもしなやかな知性・感受性の涵養を重んじている、という点は本書全体に流れる通奏低音となっている。

以上の概要を踏まえると、本書の強みとして少なくとも次の3つはあげられるだろう。すなわち、①日本のIRでは希薄であったポスト実証主義的な分析視角をその必要性が浮かび上がるような形で導入している、②ポスト実証主義的な潮流のなかで最先端の論点について各執筆者の見解を織り込みながら論じている、③抽象度の高い問題

を扱っているにもかかわらず平易で読みやすい記述になっている、という点において日本では類書のない著作であると評価できよう。IRの教科書的な知識を有する学生にとっては、同書を読んだうえで各執筆者の他の論考にも目を通すだけでも、ポスト実証主義の流れを汲む研究動向について格段に理解しやすくなるだろう。そういった意味において、本書には日本語で書かれたIRの導入書レベルの知見を大幅に改新したという意義がある。しかしながら、同時に明らかになったのは、リベラル国際秩序／パラダイム間論争の「終わり」にはあまり焦点が当てられていないということである。そうすると、当然ながら「日本からの応答」も十分になされているとは言いがたく、それぞれの論考で各々が危惧する「終わり」をめぐって論じられているにすぎないとも捉えられる。

4. 残された課題——「日本からの応答」をめぐる自己省察的考察

リベラル国際秩序／パラダイム間論争の「終わり」論は本書全体を貫くような主題とは成りえなかったものの、少なくとも評者には現代日本において看過しえない問題のように感じられた。そこで本節では、副題に掲げられた「日本からの応答」という文言に向き合うことで、本書の問題提起を受けて浮かび上がってきた新たな課題について論じてみたい。

まず、本書の試みを大きく括るならば、「日本からの応答」というよりも「日本への導入」であったと言えるだろう。各執筆者ならではの着眼点から議論が繰り広げられてはいたものの、*EJIR*や *Millennium: Journal of International Studies* といったポスト実証主義的な色彩が濃いジャーナルで見られる分析視角を日本に導入したという意味合いが強かったように感じられる。そもそも、*EJIR*でなされた問題提起などに「応答」しようとするならば、英語で執筆して英語圏の学術言説／コミュニティに働きかけるべきであろう。しかし、それを日本語で執筆したということは日本語の学術言説／コミュニティに働きかけたことになる。それにもかかわらず、「日本からの応答」と銘打たれたところもまた本書の興味深いところである。商業出版であるからには編者や出版社のあいだで「いける」という見込みがあったのではないかと思われるが、そのような見込みを抱いた背景にはどのような認識があったと推察できるだろうか。

もちろん、近年になって日本のIRを自己省察的に振りかえる試みが活況を呈していることは大きな追い風となったと考えられる。しかし、それに加えて指摘したいのは、本書の底流を成している主張が日本のIR学界におけるマジョリティの潜在的な合意となっているのではないかという点である。本書では量的分析やフォーマル・メソッドをはじめとした実証主義的なアプローチに対峙する形であらわれた潮流を汲み

取っており、「不可知・計量不可」なものを捨象せずに感性や知性を養うことの重要性を論じている。歴史研究や地域研究の多さが日本の IR 学界の特徴だとするならば、実証主義的なアプローチに批判的な立場をとることは理解を得やすいものであろう⁽⁶⁾。このように、受け入れられやすいところで議論が繰り広げられた結果として、歴史研究や地域研究が多いことは日本の IR の良さとしてのみ扱われ、そのなかで見受けられる差異や難点については視野に入れられていない。仮に「日本の IR に見られる特殊性は世界的に見ても価値がある」ことを浮かび上がらせる文言が「日本からの応答」であったとするならば、かつての日本文化論に潜んでいたナショナリズムと同様の構図のようにも見えてくる（青木 1999）。

では、リベラル国際秩序ないしパラダイム間論争の「終わり」論に「日本からの応答」を行うとしたらどのような議論がありえたのだろうか。主に前者に焦点を当てて考えるならば、当事者研究的／人類学的な見地からの応答がありえるだろう。英語圏で提示された議論に触発されつつも、日本（語）というフィルターを通して見える世界／行える思考に意識的になり、そこから問題提起を行うという方向性である。石田雄や京極純一といった先達の著作群に見て取れる政治文化論的なアプローチなどが参考になろう。グローバル IR につらなる文脈を視野に入れつつも、世界の多様な現れの一つのあり方として日本の事例に焦点を当て、異なる世界観とのあいだに見て取れる権力関係を読み解いていく考察などが思い浮かぶ。アメリカや中国をはじめとして、日本と関わりの深い国々が現行の国際秩序に批判的な姿勢を示しつつあるなかで、日本のあり方を見つめ直すうえでも意義を帯びうる課題のように思われる。

他方で、後者について考えるならば、そもそも日本ではすでに「終わっていた」のではなかろうか。日本におけるパラダイム間論争として頭をよぎるのは、戦後日本外交の方向性をめぐって繰り広げられた論争である。第 2 次世界大戦後の講和論争から日米安保条約の改定（1960 年）をめぐるところまでは、保守派と革新派という準拠枠のもとで論壇を主戦場とする議論が熱を帯びていた。しかし、日米安保条約が自動延長された 1970 年頃から「9 条＝安保体制」が保革を越えた「暗黙の諒解事項」となっていく（酒井 1991）、日本の外交路線をめぐって顕在化していたパラダイム間論争も後景化することになる。日本外交をめぐる見解の相違がなくなったわけではないものの、リアリティをもって語られる「現実」の幅は限りなく狭まっていったと言えるだろう。学界でも歴史・地域・理論・非国家主体の「棲み分け」によって表立った論争が見られないことが指摘されており（田中 2009）、そういった意味において日本ではかねてより「終わっていた」。そこで、*EJIR* への応答に加えて気にかかるのは、日本では「終わっていた」ことをどのように捉えたらいいかという点である。

ひとことで言えば、「日本における応答」もまた重要ではないかということである。

パラダイム間論争の終わりを英語圏の IR の問題としてのみ理解するのではなくて、日本の学界における課題としても受け止めるべきではなかろうか。というのも、歴史研究や地域研究においても、分析者自身の世界認識 (theory: 西周の訳によれば「観察」) のあり方は研究を大きく方向づける役割を担っている。一例として、日本の IR 学界でよく耳にする「一次史料=行政文書」という言いまわしについて考えてみよう。このような言いまわしが成り立つのは、政府の意思決定に焦点を当てる外交史などの視座が多くを占めているゆえであろう。しかし、グローバルな現象について歴史を遡って考えるときの立脚点は、外交史のほかにも社会史や思想史をはじめとして幅広く設定しうるはずである。当然ながら、それぞれの研究目的に応じて一次的な史料は変わってくる。それにもかかわらず、このような文言だけがあたかも正答のように独り歩きしているとしたら、史料によって視野が狭められることにもなりかねない。これはあくまでも 1 つのたとえ話にすぎないが、分析者が依って立つ存在論や認識論を意識化することが歴史研究や地域研究においても意味を持つことは明らかである (五十嵐論文)。

これを煎じ詰めれば、歴史研究において批判的な方法論への関心が薄かったという点に行き当たるだろう⁽⁷⁾。歴史学においては、ホワイト (Hayden White) をはじめとする素朴実証主義/本質主義への批判 (White 1973) が勢いづいた頃から言語論的/物語論的転回が意識されるようになっていた。これを受けて、一部ではホロコーストを否認する歴史修正主義と結びつく事態を引き起こすこともあったものの、歴史叙述とフィクションのあいだの境界線を見つめ直すという方法論レベルの論争が喚起されたことは重要である。こうした自己省察を経たことで、歴史叙述が帯びうる修辞性や政治性を自覚しながら、本質主義批判とも折り合いつけた記述が志向されるようになったと見ることができよう。ひるがえって、日本の IR における歴史研究について言えば、このような方法論レベルの論点にはあまり関心が向けられてこなかった。伝統的な政策決定過程分析が多くを占めていたとしても、それらもまたナラティブとプロットの混合物として歴史的出来事を言語的に構成するものである以上、歴史哲学的なりフレキシビズムの視点が無関係なわけではない⁽⁸⁾。とりわけ、複数の歴史語りによって織り成される歴史認識問題などを捉えるにあたっては、歴史の生成/再生産の過程で働く力であったり、自らの歴史語りが帯びうる意味合いであったり、歴史学の自己省察を経て生み出された見地が示唆に富むのではなかろうか⁽⁹⁾。

新たな分析視角を模索するうえでの可能性の問題だけでなく、すでに起きている現象からも「日本における応答」が意味を持つと主張することができるだろう。たとえば、有識者会議を思い浮かべてもらいたい。日本でも政府が有識者会議を活用するようになって久しいが、外交・安保をめぐるっては限られた有識者がたびたび登用されてきた。日本国際政治学会で設けられている 4 つの制度的ブロック (歴史、地域、理論、

非国家主体)に即して言えば、地域や理論、非国家主体に主軸を置いた研究者はあまり見受けられず、主に歴史に主眼を置いてきた研究者が多いことがわかる。日本外交に造詣が深い研究者が歴史ブロックに多いという事情に加えて、外交交渉のリアリティに肉薄するような研究から政策決定をめぐる思考や制約に通じていたり、これまでの政治外交上の経緯についても仔細に把握していたりと、歴史的な研究を行うなかでステイトクラフトが養われるという面もあるのかもしれない。しかし、別の角度から見れば、ある特定の視角や知見に偏った形で政策形成が方向づけられてきた可能性も否定しえないのではなからうか⁽¹⁰⁾。現代世界では、かつての「西側陣営」のような政策を方向づける準拠枠も機能しなくなり、国ごと、地域ごと、イシューごとに異なる秩序観が幾重にも重なり合っている。従来の政策的パースペクティブが与える条件のなかでの問題解決には限界があり、パースペクティブそのものを見つめ直す必要性が高まっているからこそ、パラダイム間論争が持つ意味は決して術学的なものにとどまらない。

5. おわりに

本稿では、葛谷彩・芝崎厚士編『「国際政治学」は終わったのか——日本からの応答』を研究史のなかに位置づけて、同書が刊行された意義について論じてきた。2つの「終わり」論や「日本からの応答」は本書の軸と成りえなかったものの、ポスト実証主義的な潮流の最前線が日本語で紹介されたことの意義は大きい。これまでは専門書でしか触れえなかった見方が噛み砕いて論じられたことで、これらのアプローチに慣れ親しむにあたっての裾野が広げられたと言えるだろう。新たな研究対象であったり、新たに直面している国際情勢であったりと、これまで与件とされてきた認識枠組みでは対応しえない状況が日本でも意識されているからこそ、ポスト実証主義的なリサーチプログラムを活用しうる局面は決して少なくないはずである。本書の到達点を踏まえて「日本における応答」が進展することを期待したい。

(1) 九州工業大学教養教育院人文社会系

(2) 本稿は、同書の書評会（世界政治研究会、於東京大学法3号館106号室、2018年12月14日）での討論コメントをもとにした文章である。研究会の主催者である石田憲先生、そして報告者として真摯に応じてくださった葛谷彩先生と芝崎厚士先生に心より感謝申し上げます。投稿を受けて建設的なご助言をくださった匿名の査読者にも深く御礼申し上げます。なお、本稿の一部はJSPS科研費18K12726の助成を受けた研究の成果である。

(3) コンストラクティビズムの理論的展開を整理したものとして政所・赤星2017があげられよう。コンストラクティビズムの展開について、①事象の社会的構成やエージェントと構造の相互

構成について存在論的次元で明確に意識し始めた時期（1980年代）、②国際政治における観念的要素の意義について実証的な検証が始まった時期（1990年代前後から90年代半ば）、③規範が国際的に伝播するメカニズムを解明する研究が活性化した時期（1990年代後半から2000年代前半）、④アクター間の論争や規範の変化を分析する研究が増えた時期（2000年代半ば以降）、という4つの時期に分類し、なかでも④の時期について整理した論考である。本稿で述べた初期のコンストラクティビズムとは、この分類でいうところの④の議論にあたる。

(4) この時期に見られた例外として、南山 2004 や大賀 2005 などがあげられよう。

(5) 例外として、Inoguchi 2007 や葛谷・小川・西村 2017、Shimizu 2019 などがあげられよう。

(6) 文系と理系という日本の区分において IR は文系寄りのディシプリンとされている。そうした制度的な背景もあるからか、日本では実証主義的アプローチが浸透しているとは言いがたい。ポスト実証主義的アプローチへの関心が薄かったことも、実証主義的アプローチが多数を占める英語圏（とりわけアメリカ）との文脈の違いもあったのではないかと推察される。

(7) この点については南山淳先生からご助言いただいた。記して感謝申し上げます。

(8) 近年になって、1970年代から80年代が本格的な外交史研究の対象になりつつある。そうしたなかで、大蔵省や通産省といったアクターが外交に関与する「経済外交」であったり、過去の戦争をいかに記憶するかという歴史認識問題であったり、従来の政策決定過程分析の手法だけでは解明しえない問題があることが意識されるようになってきている（井上 2019：8）。

(9) このような分析視角からの研究として、たとえば山口 2011 があげられるだろう。インドネシア東部のブトン島に存在する多様な歴史語りに焦点を当て、それぞれのコンテクストを踏まえながら複数の語りに見られる齟齬などから考察を展開し、『歴史語り』が人々の生活の時空間のなかで生きられているともいえる、彼らの生の在り方そのものを描き出した労作である（山口 2011：321 原文には傍点有）。日本の IR に限って言えば、ウェストファリア史観の脱構築（明石 2009；山下・安高・芝崎 2016）に近い分析視角からの試みと見ることができよう。

(10) たとえば、日本の安全保障政策をめぐる抑止論の観点から軍事的な備えの強化などを促す議論がある。他方で、「抑止力の強化」の名のもとに軍備拡張の悪循環に陥る可能性も否定しえない（安全保障のジレンマ）。そうしたなかで、抑止に依存しない形での安全保障強化の方策を模索する議論も IR には見られるが、抑止論のみが IR 的な処方箋だと捉えられているとすれば特定の視角や知見に偏った形で政策形成が方向づけられてきたということになる（芦澤 2016）。

【参考文献】

- 青木保（1999）『「日本文化論」の変容——戦後日本の文化とアイデンティティ——』中央公論新社。
- 芦澤久仁子（2016）「安保法制反対運動をワシントンから再考する——国際政治学の専門家からは期待の声が上がっている」『論座』（<https://webronza.asahi.com/politics/articles/2016030100003.html>：2020年2月23日最終閲覧）
- 井上正也（2019）「日本の国際政治学における日本外交史」日本国際政治学会制度整備・自己点検タスクフォース編『日本の国際政治学——日本国際政治学会における研究の系譜と特徴』（http://jair.or.jp/archives/jair_ir.html：2020年2月23日最終閲覧）。
- 明石欽司（2009）『ウェストファリア条約——その実像と神話』慶應義塾大学出版会。
- 大賀哲（2005）「日本外交史における境界の政治学——排日移民法とナショナル・アイデンティティ」『国際政治』第140号、35-56頁。

- 大賀哲 (2006) 「国際関係論と歴史社会学——ポスト国際関係史を求めて」『社会科学研究』第 57 巻第 3・4 号、37-55 頁。
- 大賀哲 (2013) 「書評 アミタヴ・アチャリヤ／バリー・ブザン編著『非西洋の国際関係理論』ロビー・シリウム編著『国際関係と非西洋の思惟』」『政治研究』第 60 巻、275-283 頁。
- 大原俊一郎 (2013) 『ドイツ正統史学の国際政治思想——見失われた欧州国際秩序論の本流』ミネルヴァ書房。
- 大矢根聡 (2017) 『日本の国際関係論——理論の輸入と独創の間』勁草書房。
- 辛島理人 (2015) 『帝国日本のアジア研究——総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』明石書店。
- 葛谷彩 (2005) 『20 世紀ドイツの国際政治思想——文明論・リアリズム・グローバリゼーション』南窓社。
- 葛谷彩・小川浩之・西村邦行編 (2017) 『歴史のなかの国際秩序観——「アメリカの社会科学」を超えて』晃洋書房。
- 酒井哲哉 (1991) 「『9 条 = 安保体制』の終焉——戦後日本外交と政党政治」『国際問題』第 372 号、32-45 頁。
- 酒井哲哉 (2007) 『近代日本の国際秩序論』岩波書店。
- 芝崎厚士 (2009) 『近代日本の国際関係認識——朝永三十郎と「カントの平和論」』創文社。
- 田中明彦 (2000) 「序章 国際政治理論の再構築」『国際政治』第 124 号、1-10 頁。
- 田中明彦 (2009) 「日本の国際政治学——『棲み分け』を越えて」日本国際政治学会編『日本の国際政治学——1. 学としての国際政治』有斐閣、1-19 頁。
- 西平 (2018) 『法とカ——戦間期国際秩序思想の系譜』名古屋大学出版会。
- 西村邦行 (2011) 「現実主義と構成主義——国際関係学史の視点から」『年報政治学』第 62 巻第 1 号、229-246 頁。
- 西村邦行 (2012) 『国際政治学の誕生——E. H. カーと近代の隘路』昭和堂。
- 初瀬龍平・戸田真紀子・松田哲・市川ひろみ編 (2017) 『国際関係論の生成と展開——日本の先達との対話』ナカニシヤ出版。
- 春名展生 (2015) 『人口・資源・領土——近代日本の外交思想と国際政治学』千倉書房。
- プラサド、プシュカラ (2018) 『質的研究のための理論入門——ポスト実証主義の諸系譜』ナカニシヤ出版 (町恵理子・浅井亜紀子・山下美樹・伊佐雅子・時津倫子・村本由紀子・藤田ラウンド幸世・岸磨貴子・灘光洋子・岩田祐子・谷口明子・小高さほみ・柴山真琴訳)
- 政所大輔・赤星聖 (2017) 「コンストラクティビズム研究の先端——規範のライフサイクル・モデルを越えて」『神戸法学雑誌』第 67 巻第 2 号、147-178 頁。
- 南山淳 (2004) 『国際安全保障の系譜学——現代国際関係理論と権力／知』国際書院。
- 三牧聖子 (2014) 『戦争違法化運動の時代——「危機の 20 年」のアメリカ国際関係思想』名古屋大学出版会。
- 宮下豊 (2012) 『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』大学教育出版会。
- 山口裕子 (2011) 『歴史語り的人类学——複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』世界思想社。
- 山下範久・安高啓朗・芝崎厚士編 (2016) 『ウェストファリア史観を脱構築する——歴史記述としての国際関係論』ナカニシヤ出版。
- 山中仁美 (2017) 『戦争と戦争のはざままで——E・H・カーと世界大戦』ナカニシヤ出版 (佐々木雄太・吉留公太・山本健・三牧聖子・板橋拓己・浜由樹子訳)。
- Acharya, Amitav and Buzan, Barry eds. (2010) *Non-Western International Relations Theory:*

- Perspectives on and Beyond Asia*, Routledge.
- Dunne, Tim, Lene Hansen and Colin Wight (2013) “The End of International Relations Theory?” *European Journal of International Relations*, Vol. 19, No. 3, pp. 405-425.
- Inoguchi, Takashi (2007) “Are There Any Theories of International Relations in Japan?” *International Relations of the Asia-Pacific*, Vol. 7, No. 3, pp. 369-390.
- Lapid, Yosef (1989) “The Third Debate: On the Prospects of International Theory in a Post-Positivist Era,” *International Studies Quarterly*, Vol. 33, No.3, pp. 235-254.
- Peoples, Columbia and Vaughan-Williams, Nick (2015) *Critical Security Studies: An Introduction*, Routledge.
- Shilliam, Robbie ed. (2011) *International Relations and Non-Western Thought: Imperialism, Colonialism and Investigations of Global Modernity*, Routledge.
- Shimizu, Kousuke ed. (2019) *Critical International Relations Theories in East Asia: Relationality, Subjectivity, and Pragmatism*, Routledge.
- Wæver, Ole (1996) “The rise and fall of the inter-paradigm debate,” Steve Smith, Ken Booth and Marysia Zalewski (eds.) *International Theory: Positivism & Beyond*, Cambridge University Press.
- White, Hayden (1973) *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, Johns Hopkins University Press. (岩崎稔監訳『メタヒストリー——19世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』作品社、2017年)